

Ⅱサムエル3章「罪人の思いを超えて」

箴言16章2節に「人には自分の行いがみな純粹に見える。しかし、主は人の霊の値打ちを量られる」とあります。クリスチャンであれば、自分はみこころを求めて、祈り、考え、行動していると思っているでしょう。しかし、本当に主のみこころにかなっているかどうかは、主がご存じで、主が正しく報いられるはずで、神の御前にへりくだることが必要だと思えます。

ダビデがヘブロンでユダの王であった7年半の間に、起こってくる出来事の中で主はダビデをさらに取り扱っていかれます。そして、主はご自身のみこころの実現へと導かれます。

1. ダビデ家とサウル家（：1～11）

1節。サウル家とダビデ家の間で長く戦いが続いていましたが、ダビデはサウル家を滅ぼそうとはしていません。それでも、戦いが続く中でダビデ家は優位になっていきました。

2節から、ヘブロンにおいてダビデに生まれた息子たちが紹介されています。ダビデ家の勢いが増していることを示しています。当時の国々においては多くの妻や側女を持つことは王の力と富を象徴しました。しかし、イスラエルの律法では王が多くの妻を持つことの警告が語られていました。しかも、三男はゲシュルの王タルマイの娘から生まれました。ガリラヤの北方の国ゲシュルの王女との結婚は、サウル家に対抗するために力を強化する政略結婚だったようです。そのような主のみこころにかなわない手段を用いて勢力を拡大していました。これらのことは将来のダビデに大きな苦難や罪の誘惑をもたらすこととなります。

一方で、サウル家はますます弱くなっていきます。その中で、サウル家の実権を握るアブネルに思いがけないことが起こります。7節。アブネルは自分の力でサウル家を守り、盛り立てていると思っています。その高慢からか、サウルの側女であったリツパと関係を持ちます。アブネルの野心を疑わせる行動です。それで、イシュ・ボシェテはアブネルを責めました。

しかし、このことはアブネルの自負をひどく傷つけます。アブネルは激しく怒り、自分がダビデの側について、サウル家から王位を移し、ダビデを全イスラエルの王とすると言い放ちます。9～10節。

アブネルとしては、長く続くダビデ家との戦いに勝算がないことを感じ、イシュ・ボシェテの頼りなさに不満を持ち、今後のために現実的な解決策を考えていたのではないかと思います。

また、「主がダビデに誓われたとおりのこと」、「それは、サウルの家から王位を移し、ダビデの王座を…堅く立てるということ」について、アブネルも知っていたということです。けれども、そのとおりになると思っていたわけではないでしょう。しかし、今やそれがイシュ・ボシェテを捨てることに十分な理由を与えています。

似たようなことは罪人であるお互いの間で起こりうることです。潜在的な不満が解決されていないために、ある出来事をきっかけに敵対関係となってしまう悲劇が教会にもあるのではないのでしょうか。

2. アブネルの交渉（：12～21）

12節。ダビデも契約を結ぶことに基本的に合意して、そのための一つの条件を出します。それはサウルの娘ミカルを連れて来ることです。かつてサウルの要求を満たして、ダビデはミカルを妻としました。けれども、ダビデがサウルから逃げている間に、サウルはミカルを別の男の妻にしてしまいました。それでも、ダビデはミカルと離婚したわけではないので、ミカルを連れて来るようにアブネルに求めます。

そして、ダビデは同じことをイシュ・ボシェテに伝えます。14節。ダビデは依然としてミカルを「私の妻」と呼んでいます。こうして、ダビデは自分がサウルの婿であることをサウル家に対して主張します。それは、サウルの婿であることで、サウル家に対して敵意がないこと、そしてイスラエルの王となれる立場であることを人々に示すことになると考えたのでしょう。

それからアブネルは、ユダ以外のイスラエルの長老たちと交渉します。彼らもイシュ・ボシェテを王としていることに不安や不満を感じていたのでしょう。「かねてから、ダビデを自分たちの王とすることを願っていた」と言われています。「今、それをしなさい」とアブネルは促します。

また、アブネルは特にベニヤミン族と「じかに話し合った」と書かれています。サウルの部族であり、アブネル自身の部族でもあるベニヤミン族を説得し、王位がユダ族のダビデに移ることを納得させました。

こうして、アブネルは全イスラエルがダビデを王とするように、精力的に準備し、イスラエルとベニヤミンの同意をとりつけて、ヘブロンにダビデのところへ行き、そのことを伝えました。ダビデにとって、平和的に王権が移ることは願ってもしないことだったでしょう。ダビデはアブネルを迎えて祝宴を開きます。21 節。

こうして、ダビデが全イスラエルの王となることが一気に進もうとしていました。それが平和的に進んでいくように見えます。けれども、そこにはそれぞれの感情や欲望が絡み合っていました。そのような現実さえも、主が許容される中で神のご計画が実現に向かっていくのです。

3. ヨアブの行動に対して（：22～39）

ところが、思わぬ事件が起こります。アブネルがダビデに送り出されて、安心して出て行った後に、略奪に出ていたヨアブが帰って来ました。アブネルが全イスラエルを集めて、ダビデを王として立てようとしていること、ダビデもそれに同意していることをヨアブは聞きますが、受け入れません。

24～25 節。ヨアブのことは、表向きにはダビデがアブネルに騙されているから、守ろうとしているようです。けれどもヨアブには、アブネルへの不信感と将軍同士の競争心、特に、自分の弟アサエルを殺されたことの復讐心がありました。

ヨアブのことはダビデへの非難、叱責のようですが、ダビデはなぜか沈黙しています。そして、沈黙したことが、ヨアブの勝手な行動を許してしまう結果となります。ダビデの知らないところで、ヨアブはアブネルを呼び戻して、暗殺してしまうのです。

この事件にダビデは苦しみます。人々がこの事件のことを聞くと、ヨアブの背後には当然ダビデがいると考えて、疑心が生まれると考えられます。イスラエルの長老たちを説得でき、ベニヤミン族に大きな影響力を持ち、ダビデ家とサウル家の和解交渉を成立させたアブネルが殺害されたことは、民から見れば理不尽なことです。和解を約束しながらダビデがそうさせたのなら、自分たちが従う王としては信頼できないと思ってしまうでしょう。

実際は、ダビデはヨアブのしたことを知りませんでした。それでダビデは、この事件に自分が関わっていないことをはっきりと主張します。28～29 節。ダビデは、ヨアブとその家族に苦難があるようにとの呪いのことばをもって彼を非難します。

それからダビデは、アブネルの葬儀を執り行います。ヨアブにも葬儀に参列させます。遺体をヘブロンに葬り、ダビデは墓の前で声をあげて泣き、哀悼の意を表しました。そして、アブネルのために哀歌を歌いました。また、ダビデは食事をするように勧められても、断食して悲しみを表しました。

36～37 節。アブネルが暗殺されたことをダビデが悲しんだことから、民は満足し、アブネル暗殺がダビデから出たのではなかったと分かり、安心しました。

38～39 節。神のみこころに沿うように動いたアブネルの暗殺を止められず、神のみこころとは無関係に動こうとしたヨアブを統率できないことを重く受け止め、自分は力のない者であることを認め、ダビデは改めて主に拠り頼もうとしています。

成熟した信仰者は、誤解を受けても言い訳せず、主をご存知で正しく報いてくださることを信頼して、沈黙することがあるでしょう。しかし、集団を導くうえで、その誤解によって求心力を失い、不満を持つ者たちが出るなら、全体に悪影響を与えることになるので、問題の所在を明らかにしなければなりません。沈黙すべき時と問題の所在を明らかにすべき時を識別できるように、主の助けを祈り求めたいと思います。

この箇所から学ぶことは、一つは、罪人の思いを超えて、神のみこころは必ず実現することです。罪人の考え、行動はありますが、それらを超えて、神のみこころがなされるという信頼をしっかりと持つことが大事です。そして、自分が神のみこころにかなう歩みをすることができるように願い、祈ることが大事です。

主への信頼に立った上でもう一つ学ぶことは、群れ全体のために、問題の所在を明らかにすべき時があるということです。罪を悔い改め、群れが主にあって一つとなって、みこころの実現に向かうために、問題を明らかにすべき時があります。その識別ができるようにと教えられます。そのためには、自分には知恵と力がないことを認めて、主に拠り頼むしかないことを教えられます。